

かれたり。此經を信ずる者の功德は分別功德品隨喜功德品に説けり。謗法と申は違背の義也。隨喜と申は隨順の義也。させる義理を不<sub>レ</sub>知<sub>トモ</sub>、一念も貴き由申は違背・隨順の中には何れにか取られ候べき。又末代無智の者のわづかの供養隨喜の功德は經文には載られざるか如何。其上天台・妙樂の釋の心は、他の人師ありて法華經の乃至童子戲、一偈一句・五十展轉の者を、爾前の諸經のごとく上聖の行儀と釋せられたるをば定謗法者給へり。然るに我釋を作る時、機を高く取て、末代造惡の凡夫を迷はし給はんは、自語相違にあらずや。故に妙樂大師、五十展轉の人を釋して云、恐人謬解者不<sub>レ</sub>測<sub>ラ</sub>初心功德之大<sub>ナルコトヲ</sub>。而推<sub>ユヅリテ</sub>功上位<sub>ニ</sub>。蔑<sub>あなご</sub>此初心<sub>ヲ</sub>。故<sub>ニ</sub>今示<sub>シテ</sub>彼行淺功深<sub>キコトヲ</sub>。以顯<sub>テ</sub>經力<sub>ヲ</sub>。文の心は謬法華經を説ん人の、此經は利智精進上根上智の人のためといはん事を、佛をそれて、下根下智末代の無智の者の、わづかに淺き隨喜の功德を、四十餘年の諸經の大人上聖の功德に勝れたる事を顯さんとして、五十展轉の隨喜は説れたり。故に天台の釋には、外道・小乘權大乘までたくらべ來て、法華經の最下の功德が勝たる由を釋せり。所以に阿竭多仙人は十二年が間、恆河の水を耳に留め、耆兔仙人は一日の中に、大海の水をすいほす。如此得通の仙人は、小乘阿含經の三賢の淺位の一

① れたり＝る ② 説けり＝説之 ③ 理＝趣 ④ 載られざるか＝ノセサルカ ⑤ 文＝云へり ⑥ をそれて＝オホシメシテ

もなき凡夫には百千萬倍劣れり。三明六通を得たりし小乗の舍利弗目連等は、華嚴・方等・般若等の諸大乘經の未斷三惑の一通もなき一偈一句の凡夫には百千萬倍劣れり。華嚴・方等・般若經を習極たる等覺の大菩薩は、法華經を僅に結縁をなせる未斷三惑無惡不造の末代の凡夫には百千萬倍劣れる由、釋の文顯然也。而を當世の念佛宗等の人、我身の權教の機にて實經を信ぜざる者は、方等・般若の時の二乗のごとく、自身をはぢ(恥)しめてあるべき處に敢て其義なし。あまさへ世間の道俗の中に、僅に觀音品・自我憊などを讀み、適父母孝養などのために一日經等を書事あれば、いゝさまたげて云、善導和尚は念佛に法華經をまじうるを雜行と申、百の時は希に一二を得、千の時は希に三五を得ん。乃至千中無一と仰られたり。何況や智慧第一の法然上人は法華經等を行ずる者をば、祖父の履、或は群賊等にたとへられたりなどいゝうとめ侍るは、如是申師も弟子も阿鼻の焰をや招かんずらんと申。問云、何なるすがた竝に語を以てか法華經を世間にいゝうとむる者には侍るや。よにおそろしくこそおぼえ候へ。答云、始に智者の申され候と御物語候つること、法華經をいゝうとむる惡知識の語にて侍れ。末代に法華經を失べき者は、心には一代聖教を知たりと思て